

短篇・文化・記録映画特集

これまでわが国では一般的な傾向として、映画を観る人たちの間に、映画と言えば長篇劇映画を意味するものとして長篇映画のみを重視し、短篇・文化・記録映画を軽視する嫌が見られないでもありませんでした。

しかし、短篇劇映画には「珠玉の短篇」という言葉にみられるように短篇としての独特の良さがあり、文化・記録映画には文化的にみて興味深い題材が映像表現されているばかりでなく、社会的にも貴重な映像が数多く含まれていて、長篇映画にはみられない別のすぐれた価値があるといえます。

フィルムセンターでは、これまでに作られてきた数多くの短篇・文化・記録映画の中から、優れた価値を有する作品を選びだし、それぞれのテーマに従って1時間前後の番組を編成して、原則として毎月第一土曜日の午後4時から《短篇・文化・記録映画特集》番組を上映することになりました。単に短篇・文化・記録映画愛好家の方々のみならず、広く一般の映画観賞者の皆さんの御利用をお勧めいたします。

1982年3月 フィルムセンター

★土曜特集（午後1時30分開映）の上映が終了し、全館入れ替えの後に上映を開始し、午後4時より開映致します。

★6月12日(土)の午後4時30分に開映します。先着順にて239名に達し次第入館を締め切ります。 一般 250円・学生 140円・小人 100円

4月3日(土) 午後4時開映

一芥川光蔵選集一

草原バルガ

満鉄弘報部1936年作品

編集・構成＝芥川光蔵 撮影＝早川弘二
白黒 23分

〈かいせつ〉

「秘境熱河」に次ぐ作品で、満州コロンバイル地方に赴き、ドライ湖に注ぐケルン川の蛇行流域で、外モンゴルに暮らす遊牧民の生活を記録したもの。パオの移動生活、ラマ寺院とその信仰、オボ祭り、羊毛刈りなど珍しい風物が撮影されている。12月8日新宿武蔵野館封切。

少年拓士の日記

満鉄映画製作所1939年作品

編集・構成＝芥川光蔵 撮影＝山口武三
白黒 29分

〈かいせつ〉

「開拓突撃隊」「興亜青年動労報国隊」「国防全線八千軒」といった、満州移民を奨励する宣伝啓発映画の一篇で、満州に渡って養豚や農耕の日々を送る愛国的な少年達を讃えている。拓士とは開拓移民として満州に渡った者の称で、その組織は統制の厳しい義勇隊方式で、映画は一人の病める少年を通して、わずかに人間的な優しさを描いている。

娘々廟會

満鉄映画製作所1940年作品

編集・構成＝芥川光蔵 撮影＝藤井静
音楽＝太田忠 録音＝金山欣二郎 解説＝中村伸郎
白黒 20分

〈かいせつ〉

「秘境熱河」等と共に芥川光蔵の代表作であり、「新しき土」(37)のアーノルト・ファンク監督から直接譲り受けたドイツ製のズーム・レンズを駆使して、日本で初めてズームング効果を活用した文化短篇映画だと言われている。撮影は処女作「満州を拓く者」(28)以来名コンビを組んだ早川一郎ではなく、「風雪二十年」(51)等の名手藤井静(藤井秀夫)が担当し、大石橋郊外の古寺、迷鎮山の年中行事(娘々(ニャンニャン)祭)の様子とそれに集まる人々の表情を細かく捉えている。文化映画ベスト・テン第5位。

* *

芥川光蔵(1884年生まれ)は、青地忠三らと共に戦前の記録映画作家を代表する一人で、満映作品の水準の高さを知らしめた人である。同志社大を卒業後満州に渡り、満鉄に入社、28年満鉄映画製作所所長に就任し、数々の優れた記録映画を製作した。今回上映の作品以外にも、「石が油になるまで」「ガンジュール」「秘境熱河」等が有名。41年満映啓民映画部所属となったが、同年7月16日、享年58歳の若さで世を去った。

5月1日(土) 午後4時開映

一亀井文夫選集一

上海

東宝映画文化映画部1938年作品

編集・構成＝亀井文夫 撮影＝三木茂
現地録音＝藤井慎一 音楽＝飯田信夫
解説＝松井翠声 白黒 75分

〈かいせつ〉

「上海」「南京」「北京」と高い水準を保ち続けた、中国大陸を舞台にする東宝文化映画の一篇。1937年8月13日、日本海軍陸戦隊と中国軍とが上海で交戦し、約4ヵ月におたつて激しい市街戦やクレーク戦が展開された。日蝕を完全撮影した「黒い太陽」(1936年)でも知られる名手、三木茂は、戦闘のつめ跡の残る上海へ赴き、録音の藤井技師を伴って、40日の間、現地の生の姿を撮影した。製作部の思惑を外れ、撮影されたフィルムには、破壊された無惨な民家、荒廃した山野、泥靴、水筒といった残骸ばかりが映っていたが、亀井文夫は、むしろこれこそが戦争の真実を語っていると考えて、編集・構成にあたり、リアルな作品に仕上げた。1939年度のキネ旬日本映画ベスト・テン第4位。38年2月1日東宝系で封切りし、ヒットしたが、軍の一部にはそのリアリズムを反感的だとみなすも現われたと言う。

小林一茶

東宝映画文化映画部1941年作品

演出＝亀井文夫 撮影＝白井茂 解説＝徳川夢声
白黒 27分

〈かいせつ〉

「上海」「北京」を製作した亀井は、続いて「戦ふ兵隊」(39年3月完成)を公開しようとしたが、陸軍からクレームが付いて上映禁止の憂き目にあった。その後で長野県観光課の協力を得て製作された「信濃風土記(三部作)の第2部が当作品である。第1部は搾取される江戸時代の農民を描いた「伊那節」(40)。第3部には、「村の経済」が予定されたが実現されなかった。「小林一茶」は、一茶のユニークな伝記映画だが、彼の句に様々な現実風景を重ねて、強烈な社会風刺、文明批判を試みている点が、如何にも亀井の面目躍如たる処だろう。戦時色濃い風潮の中で文部省の文化映画認定を外されたが、第2回日本映画雑誌協会映画賞文化映画ベスト・テンで「娘々廟會」に次いで第6位となった。

* *

亀井文夫は1908年福島県に生まれ、文化学院大学部中退後、レニングラード映画専門学校に留学、帰国後33年にP.C.L.に入社、文化映画製作の道へ入る。戦前戦後を通じて一貫した自由主義者であり記録映画における演出者の重要性を主張した。他に「日本の悲劇」「戦争と平和」「女の一生」「世界は恐怖する」等多くの名作がある。

6月12日(土) 午後4時30分開映

一白井茂選集一

秩父宮殿下立山御登山

文部省1925年作品

撮影＝白井茂 無声・白黒 21分
〈かいせつ〉

ゲートルを巻いた秩父宮が颯爽と山の頂上を極めるシーンを含む皇族の記録映画であり、また当時の登山風物を知る上でも興味深いフィルムである。撮影班はその頃まだアイモはなく、三脚つきのバルボだったので苦労があったらしい。

黒部峡谷探検

文部省1928年作品

撮影＝白井茂 指導＝冠松次郎
無声・白黒 24分

〈かいせつ〉

文部省社会教育課が局に昇格し、製作を兼ねる映画部が1927年9月から設けられた。この作品はその発足間もない頃のもので、宇奈月から鹿島へ出てロープで黒部峡谷へ降りるという冒険をしながら撮影している。白井茂はフリーの立場で参加し、映画部の人々が助手を務めた。

電波に聴く

東京朝日新聞社1935年作品

後援＝日本放送協会 監修＝成沢汎川
撮影＝白井茂 白黒 16分

〈かいせつ〉

当時のラジオは、現在のテレビと同じような媒体の地位を保っていたが、その放送がどのように作られているかを一般聴衆に見せるといって大変興味深い記録映画となった。2.26事件で射殺された高橋大蔵大臣や流行歌を歌う若き日の赤坂小梅、指揮する山田耕筰、舞台上立つ古川ロッパの姿を見られるのも楽しい。

尾瀬

文部省1935年作品

撮影＝白井茂 録音＝写真化学研究所
白黒 10分

〈かいせつ〉

日光国立公園に含まれる有名な湿原地帯、尾瀬の記録映画で、白黒ながら美しい撮影と簡潔な構成とによって尾瀬の自然、特に高山植物を紹介している。手法にサイレント映画的なタッチが見られるが、実際、1931年に製作、撮影され、録音、アナウンスだけは1935年に加えられたのである。戦後は石川茂樹によって、「尾瀬」(1962年・学研製作)がカラーで撮影され、数々の賞を得ている、

* *

白井茂(1899年東京生まれ)は、写真術を学び、映画カメラマンとなり、東京シネマの「関東大震火災実況」で注目された。P.C.L.に入社後、日映の技師長候を歴任、戦後は日映新社製作部長となる。亀井文夫との共作も多く、日本記録映画の草分け的存在の一人である。

★参考文献＝「日本教育映画発達史」(田中純一郎著・蝸牛社)「日本映画監督全集」(キネマ旬報社)「フィルムセンター」第11・12号)他。

東京国立近代美術館 フィルムセンター 中央区京橋3-7-1 ☎(561)0823 地下鉄・京橋駅(銀座線)、宝町駅(都営浅草線)下車

短篇・文化・記録映画特集

これまでわが国では一般的な傾向として、映画を観る人たちの間に、映画と言えば長篇劇映画を意味するものとして長篇映画のみを重視し、短篇・文化・記録映画を軽視する嫌いが見られないでもありませんでした。しかし、短篇映画には〈珠玉の短篇〉という言葉にみられるように短篇としての独特の良さがあり、文化・記録映画には文化史的にみて興味深い題材が映像表現されているばかりでなく、社会的にも貴重な映像が数多く含まれていて、長篇映画にはみられない別のすぐれた価値があるといえます。

フィルムセンターでは、これまでに作られてきた数多くの短篇・文化・記録映画の中から、優れた価値を有する作品を選びだし、それぞれのテーマに従って1時間前後の番組を編成して、原則として毎月第一土曜日の午後4時から〈短篇・文化・記録映画特集〉番組を上映することになりました。単に短篇・文化・記録映画愛好者の方々のみならず、広く一般の映画観賞者の皆さんの御利用をお勧めいたします。

1982年6月 フィルムセンター

★土曜特集（午後1時30分開映）の上映が終了し、全館入れ替えの後に出入館開始、午後4時より閉館致します。

★7月10日(土)のみ午後4時30分に開映します。先着順にて239名に達し次第入館を締め切ります。 一般 250円・学生 140円・小人 100円

7月10日(土) 午後4時30分開映

—黒木和雄選集—

海 壁

岩波映画製作所1959年作品

企画＝東京電力 脚本＝桑野茂 台辞＝飯島耕一 演出・編集＝黒木和雄 撮影＝館石昭、加藤和三 音楽＝松村鎮三、池野成、小杉太郎 カラー 59分（かいせつ）

当時としてはわが国最大規模と称された東京電力横須賀火力発電所の建設に伴い、その敷地造成のため久里浜沖の海中を埋立てる工事が開始されることになったが、この作品はその防波堤建造とテトラポットの利用を説いた建設記録映画である。丸ビル10杯分に相当する土砂、177万3千立方メートルで海中を埋め立てるといふこの大工事は、1957年10月から開始された。千駄ヶ崎の丘陵地帯がダイナマイトで切り崩され、水深15メートルの海底に多量のテトラポットと共に投入される様子が、水中撮影の第一人者館石氏のカメラをまじえて撮し出される。このテトラポットは大太平洋の荒波を50%も破壊するという。工事は海から伸びるケソン護岸と陸からの埋立地が最後の80メートルを徹夜で繋ぐ作業に入る。その後、瞬間最大風速45メートル、6メートルを越す波浪がこの造成地を襲うが、人々の懸命の努力で守られ、翌58年8月に発電所本館の基礎工事が着工されるに及んだ。この間10ヵ月の苦闘の様子が描かれているのがこの作品である。

わが愛北海道

岩波映画製作所1961年作品

企画＝北海道電力 脚本・演出＝黒木和雄 撮影＝清水一彦、渡辺重治 出演＝関口正幸、及川久美子 声＝木村功 カラー 37分（かいせつ）

北海道の発展する産業を中心に、四季折々の風物の中に一組のカップルを配して描いた実験的記録映画である。この作品では、PR映画にありがちな単なる事象の羅列を極力排し、若い恋人同士の愛の進行と共に、自分自身を発見するように北海道の風土や歴史を考えていくようなユニークな視点も顕著である。若い女性を演じているのは、後に「モロローのような女」(1964・渋谷実)で華々しくデビューした真理美である。

* *

黒木和雄監督(1930年生まれ)は1954年に岩波映画製作所に入社、「海壁」や「ルポタージュ炎」(60)などの作品で、羽仁進と共にユニークな作家として注目されるようになった。66年の「とべない沈黙」で初めて劇映画を手がけ、前衛的な映像で日本映画に新風を吹きこんだ。その後「キューバの恋人」(69)、「日本の悪霊」(70)、「竜馬暗殺」(74)、「祭りの準備」(75)、「夕暮まで」(80)等の意欲的作品を発表している。

8月7日(土) 午後4時開映

—大藤信郎アニメーション選集—

与七郎の敬礼

1933年作品 製作＝文部省 無声10分
時代劇仕立てのアニメで、血気に走る与七郎という武士が他人を馬鹿にしていたが、ある日家老のわずかな過失をとがめたるなど礼儀を尽さなかったが、やがて自分も同じ過失を犯して満座の中で大恥をかかすという教訓アニメ。

天狗退治

1934年作品 製作＝千代紙映画社 白黒10分
夜廻りのちんころ平と主人の団子兵衛が、次から次へ襲ってくる小天狗相手に大奮闘、ついに2人で天狗を退治するという話。この2人のキャラクターは、初期の大藤作品の主人公でもある。

黄金の花

1930年作品 製作＝千代紙映画社 原案・脚本＝大藤信郎 無声 白黒 12分
落語の《田能久》のアニメ化であるが現在残っている大藤作品では一番古いものである。

蜘蛛の糸

1946年作品 製作＝三幸映画社 白黒10分
芥川龍之介の同名短編小説をアニメ化した影絵で、第一回ウルグアイ映画祭で入賞した作品。晩年の大藤作品に特有の不気味な描写がこの作品あたりから顕著になっていった。

くじら

1952年作品 製作＝千代紙映画社 作曲＝塚原哲夫 コニカラー 9分

1927年に製作した題材を、カラーフィルムの技術向上に伴って色セロファンを使って再アニメ化したもの。鯨に呑みこまれた人間のエゴの対立を描いたこの作品は、1958年度カンヌ国際映画祭で短篇部門の第2位を獲得した。

幽霊船

1956年作品 製作＝千代紙映画社 音楽＝平井康三郎 フジカラー 11分

海賊船に襲われた貴族たちは、男は皆殺しにされ、女は捕われていたおふれ、美しい姫は自殺した。後年、怨霊につつまれたこの船が海賊船につきまとい、海賊たちはついに死んでしまう。この影絵アニメは、1956年ヴェネツィア国際映画祭で特別賞を受賞した。

* *

アニメ作家の大藤信郎(1900～61年)は、千代紙を使った独特の作品「馬具田城の盗賊」を1925年に発表して注目された。彼の作品は子供向きというよりは大人向を対象としており、特に戦後は影絵の分野で陰湿とも思えるエロティズムが顕著となった。死後、彼の業績を記念して毎日映画館グループのアニメ部門に《大藤賞》が設けられた。

9月4日(土) 午後4時開映

—勅使河原宏選集—

北 斎

青年プロダクション1953年作品
監修＝岡部長景、高橋誠一郎 脚本・構成＝吉川良 演出＝勅使河原宏 撮影＝浦島進、長谷川博美、瀬川順一 音楽＝清瀬保二 解説＝加藤嘉 白黒 23分（かいせつ）

江戸時代の浮世絵師として歌麿や写楽と共に、その代表的な一人であった葛飾北斎であるが、彼が残した《富嶽百景》や《北斎漫画》等の作品を通して、民衆画家としての北斎という視点から、彼の人生観や社会観を描き出したのがこの作品である。他の浮世絵師の多くが、遊女や役者を描いたの相較べ、北斎は風景画や世相風刺画に独自の境地を開いたと言われ、彼の社会に対する鋭角な視点がこの作品でも強調されている。なおこの作品は、映画監督としての勅使河原の記念すべき処女作である。

ホゼー・トレス

勅使河原プロ1960年作品

監督・撮影＝勅使河原宏 音楽＝武満徹 録音＝奥山重之助 タイトル＝粟津潔 ナレーター＝井川比佐志、矢野宣 歌＝ホゼー・トレス 白黒 25分（かいせつ）

1955年、ニューヨークを訪れた勅使河原が、ボクシングの名トレーナーであるクスマトの下で練習に励む22才のブルトリコ人、ホゼー・トレスが勝利を得るまでの過程を追った作品である。グラマシー・ジムで激しい練習に耐え、緊張の中に試合へのぞみ、TKOで勝利を得、迎えに来た恋人と家路に着くまでの闘う男の姿が生々しく描き出されている。なお、このジムが採用している練習法は両手で顔面を覆い、両肘でボデーを守るピーカプースタイルでクスマトが考案した独自のものである。

動く彫刻—ジャン・ティンゲリー

勅使河原プロ1963年作品

監修＝勅使河原宏 詞＝大岡信 音楽＝柳慧 語り＝中村吉右衛門 白黒14分（かいせつ）

1963年、東京の南画廊でジャン・ティンゲリー展が開催された折、その展示会の模様や動く彫刻「白鳥の歌」制作中の作家自身を撮影した作品である。ティンゲリーは1925年にスイスに生まれ、〈芸術における運動の問題〉を追求してその作品化にあたり、廃物を組み合わせたメタ・マティック絵画機械をはじめ、各種の動く彫刻彫刻を作った作家である。

* *

勅使河原宏監督(1927年生まれ)は、美術映画「北斎」を発表して映画の魅力にとりつかれ、62年には初の劇映画「おとし穴」を発表、「砂の女」「他人の顔」「燃えつきた地図」など前衛的作品を次々に日本映画界に送り出した。

短篇・文化・記録映画特集

これまでわが国では一般的な傾向として、映画を観る人たちの間に、映画と言えば長篇劇映画を意味するものとして長篇映画のみを重視し、短篇・文化・記録映画を軽視する嫌いが見られないでもありませんでした。しかし、短篇映画には〈珠玉の短篇〉という言葉にみられるように短篇としての独特の良さがあり、文化・記録映画には文化史的にみて興味深い題材が映像表現されているばかりでなく、社会的にも貴重な映像が数多く含まれていて、長篇映画にはみられない別のすぐれた価値があるといえます。

フィルムセンターでは、これまでに作られてきた数多くの短篇・文化・記録映画などの中から、優れた価値を有する作品を選びだし、それぞれのテーマに従って1時間半前後の番組を編成して、原則として毎月第一土曜日の午後4時から〈短篇・文化・記録映画特集〉番組を上映することになりました。単に短篇・文化・記録映画愛好家の方々のみならず、広く一般の映画鑑賞者の皆さんの御利用をお勧めいたします。

1982年9月 フィルムセンター

★午後1時30分開映の回が終了し、全館入れ替えの後に出入札を開始し、午後4時より開映致します。

★先着順にて239名に達し次第入館を締め切ります。

一般 250円・学生 140円・小人 100円

10月9日(土) 午後4時開映 —アメリカ映画を創った2人—

エディソンという名の男

A Man Called Edison

D・アトキンソン・プロ1970年作品
製作・編集＝デニス・アトキンソン 脚本＝ジェームズ・L・ランドバッチャー
ナレーション＝ロバート・リッター
カラー 26分 英語版(日本語スーパーなし)
〈かいせつ〉

アメリカが世界に誇る発明王トーマス・アルヴァ・エディソン(1847～1931)に捧げられた作品で、映画芸術の創造に貢献した彼の天才ぶりを余すところなく伝えるものである。《シネマトグラフ・リュミエール》に先立つ、覗き見式映画《キネトスコープ》や、拡大投影できる《ヴァイタスコープ》といった映画草創期の器械を見せて、そのメカニズムを説明しながら、同時に、その頃製作されたフィルムの数々の断片を見せてくれる。また映画初期に活躍した映画人たちの貴重な写真なども紹介している。ホーナーのゾーエトロップ、マイブリッジの連続写真実験、イーストマンによるセルロイド製フィルムなどを総合していった、エディソンの卓抜なアイディアは、現在見ても興味深い。

D・W・グリフィス—アメリカの天才

D・W・Griffith—An American Genius
ウェーヴ・テレビ1970年作品

監督＝ウォルター・ロウ ナレーション＝リチャード・シュニツェル D・W・グリフィスの声＝ヴィクター・ジョリーカラー 55分 英語版(日本語スーパーなし)
〈かいせつ〉

草創期のアメリカ映画をリードし、映画の様々なテクニクを発見して今日もなお世界の映画人に直接的、間接的な影響を与え続けている〈アメリカ映画の父〉デーヴィッド・ウォーク・グリフィス(1875～1948)。彼の数多くの作品は、映画史上に巨大な足跡を残したが、その業績が、現在もなお、如何に新鮮であるかは、本年7月にフィルムセンターが連続上映した《D・W・グリフィス監督特集》において、すでに明らかであろう。この映画はグリフィスの一生と仕事を描いたもので無名の舞台俳優時代から映画への転身、さらに高い作品評価と興行的失敗など、彼の人生の様々な出来事を紹介している。「国民の創生」(1915)「イントレランス」(1916)をはじめとする有名な作品も挿入されている。なお、グリフィスの声を担当したヴィクター・ジョリー(1902年生まれ)は、「風と共に去りぬ」「奇跡の人」「パピヨン」などでも有名な息の長い名脇役である。

11月6日(土) 午後4時開映 —政岡憲三アニメーション選集—

難船物語・オオ篇 猿ヶ嶋

日活太秦漫画映画部1930年作品
原作・脚色＝清水秀雄 漫画製作＝政岡憲三 操作撮影＝葎屋映治 漫画助手＝島森卓二、原田誠一、熊川正雄
白黒 19分 無声(字幕付き)
〈かいせつ〉
政岡憲三(1898年生れ)の第1作。赤ん坊が猿ヶ嶋に漂着。いたずらっ子に成長し、猿たに嫌われて逃げ出すが…。

べんけい対ウシワカ

日本動画研究所1939年作品
原画・監督＝政岡憲三 動画＝熊川正雄、桑田良太郎 仕上＝木村角山 白黒 7分
〈かいせつ〉
政岡憲三が松竹の援助によって設立した日本動画研究所の第1作。牛若丸が五条の橋で弁慶を降参させる有名な話をアニメ化。2人の声は政岡夫妻が担当。

くもとちゅうりっぷ

松竹動画研究所1943年作品
企画＝能木喜一郎 原作・作詩＝横山美智子 脚色・演出・撮影＝政岡憲三 動画＝桑田良太郎、熊川正雄 背景＝村上博彬、岡本庚 編集＝吉村祥 作曲・指揮＝弘田龍太郎 唄＝村尾護郎、杉山美子 演奏＝松竹交響楽団 白黒 15分
〈かいせつ〉
童話集《よい子つよい子》の1篇をもとにアニメ化された。天道虫とそれを追う蜘蛛と、保護するチュウリップをめぐる嵐の一夜を描く。昆虫や花を擬人化し、高度なテクニクで仕上げられた詩情溢れるミュージカル風短篇。戦時下作品とは思われぬ程の出来で、日本アニメ史上の傑作である。

すて猫トラちゃん

日本動画社・東宝教育映画1947年作品
配給＝東宝 製作＝井関輝雄 脚色＝佐々木富美男 演出＝政岡憲三 作画・撮影＝日本漫画映画 作詞＝佐伯孝男 作曲・指揮＝服部正 白黒 21分
〈かいせつ〉

山本早苗、葎下泰次、政岡憲三らが設立した日本動画社の第1作。この《トラちゃん》は後、シリーズ化された。擬人化した猫のキャラクターが楽しく、一種の家庭劇として見る事ができる。

トラちゃんのカンカン虫

東宝教育映画1950年作品
製作＝山本善次郎 脚本＝松崎興志人 演出＝政岡憲三 撮影＝葎下泰次 作画＝日本動画社 動画＝熊川正雄他 作曲・指揮＝坂本良隆 唄の配役：トラちゃん＝三枝君子、三毛ちゃん＝安齋愛子、ドラ＝村尾護郎 白黒 10分
〈かいせつ〉

船員ドラの葉巻の不始末で積荷の花火が爆発して大騒動。《トラちゃん》シリーズの1篇で、政岡憲三の引退作品。

12月4日(土) 午後4時開映 —下村兼史選集—

或る日の干涸

理研科学映画1940年作品
演出＝下村兼史 撮影＝佐野時雄
白黒 20分
〈かいせつ〉

下村兼史(1903年生れ)は、慶応大学中退後、39年理研科学映画に入社、同年デビュー作「水鳥の生活」で好評を博し、続く40年8月1日、国際劇場公開となったのがこの映画。千葉県行徳海岸や九州有明湾に2年がかりのロケを行ない、下村兼史を一躍有名にした作品で、同年文部大臣賞受賞をはじめ多くの栄誉に輝き、日本記録映画、教育映画史上の一つの典型を築き上げた。遠浅の干涸に棲息するフジツボ、カキ、シヤコ、千鳥、シギなどを、望遠レンズで辛抱強く捉えている。撮影の佐野時雄とは前作「水鳥の生活」でもコンビを組んでいる。

ちどり

東宝教育映画1946年作品
製作＝湯原甫 脚本・演出＝下村兼史 撮影＝浦島進 美術＝北長雄 録音＝長岡憲次 音楽＝服部正 照明＝伊藤一男 音響効果＝園田芳龍 動画＝市野正二 白黒 33分
〈かいせつ〉

ある少女が、川原で偶然見つけたコドリの卵3個を大事に育て、標本にしようとする少年たちから守りながら、絵日記をつける。大雨の日には心配するが、やがて卵が孵化し、無事ヒナ鳥が巣立って行く。少女のモノローグで始まり、少年たちのやりとりを交え、絵日記のスケッチを見せ、アニメーションを説明的に使うなど、記録映画としては多彩なテクニクを用いている。明るい画調の撮影が、当時としては出色の出来映えを見せている。映画世界社賞受賞。

特別天然記念物 ライチョウ

日本シネセル1967年作品
企画・制作＝文化財保護委員会、富山県長野県、静岡県、制作＝静永純一 プロデューサー＝高木邦治、佐藤吉彦 脚本・編集＝樺島清一 演出＝下村兼史 撮影＝伊藤三千雄、赤松威善、村瀬昭夫 音楽＝三善晃 解説＝城達也 カラー 32分
〈かいせつ〉

文化庁文化財保護委員会の企画により日本シネセルに招かれ、天然記念物ライチョウの生態を、北アルプスの立山と富士山に追い、四季を通じての大規模な長期撮影によって、日本記録映画の歴史に残る作品となり、また生涯を通して野鳥を追い続けた下村兼史の遺作となった映画。キネマ旬報文化映画ベストテン第1位、第14回アジア映画祭最高賞、教育映画祭最高賞、第8回科学技術映画祭最優秀賞、第22回芸術賞など多数を受けた。

短篇・文化・記録映画特集

これまでわが国では一般的な傾向として、映画を観る人たちの間に、映画と言えば長篇劇映画を意味するものとして長篇映画のみを重視し、短篇・文化・記録映画を軽視する嫌いが見られないでもありませんでした。しかし、短篇映画には《珠玉の短篇》という言葉にみられるように短篇としての独特の良さがあり、文化・記録映画には文化史的にみて興味深い題材が映像表現されているばかりでなく、社会的にも貴重な映像が数多く含まれていて、長篇映画にはみられない別のすぐれた価値があるといえます。

フィルムセンターでは、これまでに作られてきた数多くの短篇・文化・記録映画などの中から、優れた価値を有する作品を選びだし、それぞれのテーマに従って1時間半前後の番組を編成して、原則として毎月第一土曜日の午後4時から《短篇・文化・記録映画特集》番組を上映することになりました。単に短篇・文化・記録映画愛好家の方々のみならず、広く一般の映画観覧者の皆さんの御利用をお勧めいたします。

1982年12月 フィルムセンター

★午後1時30分開映の回が終了し、全館入れ替えの後に出札を開始し、午後4時より開映致します。

★先着順にて239名に達し次第入館を締め切ります。

一般 250円・学生 140円・小人 100円

1月8日(土) 午後4時開映

—厚木たか選集—

或る保姆の記録

芸術映画社1942年作品

脚本・構成＝厚木たか 演出＝水木荘也
撮影＝橋本竜雄、竜神孝正 音楽＝深井史郎 白黒 36分
(かいせつ)

戦時下の東京でカメラを廻し、働く母親たち、保育所に預けられた子供たち、そして園児たちを世話する保母らの日々をヒューマニスティックな視点で描いた記録映画で、封切時(東宝系2月4日)は全6巻であったが、戦後の再映時に4巻に短縮された。厚木たかは撮影に入る前に何ヶ月にもわたって保育園で綿密な取材をし、それをもとにしてシナリオを構成したが、撮影は現在言うところのアドリブ演出、隠し撮りを取り入れ、子供たちの生々しい姿を捉えることに成功した。演出の水木荘也はこれをスナップ主義と呼んだが、今日のドキュメンタリー映画が常用する多くの重要な手法をすでに実践していたと言い得るし、羽仁進の「教室の子供たち」(1955)等先取りしていたとも言えるだろう。即興や隠し撮りの効かない場面では再現撮影(ヤラセ)も用いられており、これらの手法の融合はセミ・ドキュメンタリー的な映画話法を見せている。戦時教育の体を成さぬという理由で陸軍情報局から睨まれたり、生フィルムを集めるのに苦労しながら完成されたこの作品は、その年のベスト・テン第5位に選ばれた。尚、撮影は荏原町のT保育所で行なわれたらしい。

わたし達はこんなに働いてる

朝日映画社1945年作品

脚本・構成＝厚木たか 演出＝水木荘也
撮影＝小西昌三 白黒 18分
(かいせつ)

海軍衣糧廠で軍服を作る女子勤労員達の猛烈な仕事振りを描いたもので、3月に完成し、情報局国民映画と銘打たれ、映画配給社を通じて6月28日に白系で封切られた。ミシン掛け、教練、ささやかな休憩、食事、訓話、朝礼等々が記録されており、敗戦直前の切迫した様相が興味深く、当時の日本を知る貴重な映像資料になっている。

おふくろのバス旅行

記録映画社1957年作品

企画＝全国視聴覚教育連盟 脚本＝厚木たか 演出＝菅家陳彦 撮影＝江連高元 白黒 20分
(かいせつ)

農村問題に目を向け、バス旅行に出かけた主婦たちの活気に溢れた喜びようを心優しく捉えた佳作。教育映画祭社会教育部門最高賞、ブルーリボン賞、キネマ旬報ベスト・テン第2位を受けている。

2月5日(土) 午後4時開映

—ラウル・セルヴェ・アニメ選集—

調子外れの音

La Fausse Note

1963年作品 仏語版 カラー 10分
* 貧しい音楽師の手廻しオルガンには調子外れの音があつて道行く人を楽しませられない。ある日、古い木馬が流した一滴の涙が大きくなって、遂に美しく正しい音に戻る…。1965年にアントワープの第6回ベルギー映画祭で最優秀アニメ・グラン・プリを受けた。

クロモフォビア

Chromophobia

1966年作品 カラー 10分
* (色嫌い)の軍隊が街を襲い全てを白黒にしようとするが、伝説の道化師ティル・オイレンシュピーゲルの活躍で、再び色彩を取り戻す…。66年ヴェネツィア映画祭アニメ部門サンマルコ金獅子賞をはじめ多くの賞を受けた傑作。

人魚

Sirène

1968年作品 カラー 10分
* 高度な文明に殺されてしまうメルヘンの世界を、港の巨大なクレーンと美しい人魚の対比の中で描き始める名作。原題が「人魚」と「サイレン」の両義を持つことは画面を見れば即座に納得される。テヘラン児童映画祭等で受賞。

ゴールドフレーム氏

Goldframe

1969年作品 白黒 5分
* 270ミリ映画を作ろうとするアメリカ映画の大物プロデューサーが自らの影とたわむれる。彼の傲慢さと孤独さが描かれており、アントワープ等で受賞した。

言うべきか言わざるべきか

To Speak or Not to Speak

1970年作品 英語版 カラー 11分
* インタヴューのマイクに対して消費される無意味な言葉の洪水を諷刺的に描いたもの。オーバーハウゼン映画祭国際賞。

X70作戦

Operation X-70

1971年作品 英語版 カラー 11分
* ある強国の行った「X70」と呼ばれるガスの実験によって人々は穏やかになり侵入した敵兵たちも天使のようになってしまふ…。ザグレブ映画祭等で受賞したSFタッチの諷刺劇。

ペガサス

Pegasus

1973年作品 蘭語版 カラー 8分
* 文明社会に適應できない鍛冶屋が鉄の馬を作るといふ悲劇で、20世紀初頭のフランドル地方の表現主義画家に影響を受けていると言われる作品。

3月5日(土) 午後4時開映

—瀬尾光世アニメ選集—

のらくろ二等兵

瀬尾発声漫画研究所1933年作品

原作＝田河水泡 作画・撮影・演出＝瀬尾光世 音楽＝落合朝彦 無声・白黒 11分
(かいせつ)

雑誌《少年倶楽部》に連載された人気漫画のアニメ化。新兵として軍隊に入った野良犬の黒吉が次々におこす失敗を描いたもので、以後、瀬尾の人気シリーズとして連作された。

いなばの国の菟さん

旭物産合資会社映画部1935年作品

作画・演出＝瀬尾光世 白黒 8分
(かいせつ)

古くから伝えられる《イナバの国の白兔》をアレンジしてアニメ化した作品。嵐の夜、大波にさわわれて島に打ち上げられた白兔が、島を抜け出したい一心でワニをだまして皮をはがされるが、通りかかった大国主命に救われる。

テク助物語・四十匹の狼

芸術映画社1940年作品

作画・演出＝瀬尾光世 白黒 11分
(かいせつ)

アラビアン・ナイトのエピソードをアニメ化した作品。最初、大衆薬品(わかも)のPR映画として作られたが、後にビンの大写しを除いた「四十匹の盗賊」として再版された。

アリちゃん

芸術映画社1941年作品

作画・演出＝瀬尾光世 音楽＝服部正 白黒 11分
(かいせつ)

文部省の委託を受けて製作されたもので、コロロギのバイオリンを盗んだアリが、コロロギの音楽隊に入れてもらおうとするが弓がないので弾けず、楽器を失ったコロロギの悲しみを思って返しに行くという話。この作品は日本最初の四段マルチを使用した本格的な多層撮影によるものといわれている。

桃太郎の海鷲

芸術映画社1942年作品

製作＝大村英之助 脚本＝栗原有茂 技術・構成＝持永只仁、田辺利彦、橋本珠子、塚本静世 演出・撮影＝瀬尾光世 音楽＝伊藤昇 白黒 29分
(かいせつ)

ハワイの真珠湾攻撃の成功を宣伝するために海軍省の依頼を受けて製作された日本で最初の長篇アニメといわれる作品で、劇映画「ハワイ・マレー沖海戦」(山本嘉次郎)のアニメ版。大藤信郎作の、「マレー沖海戦」と対になるもの。